

## 平成18年度第4回府中市小中一貫教育検討会議概要

平成19年2月27日

府中市立第三中学校

### 1. 授 業

#### 小学校第4学年（特別活動：ピア・サポート訓練）

子どもの状態を把握するためにアンケートを実施した。その中で、「イライラする事が多い」「イライラした経験がある」という子どもが70%いた。また、そのイライラを解消する方法として、「八つ当たりをする」「なにも言わずに我慢する」「泣く」「仕返しをする」などと回答していた。



これらの課題について、ピア・サポート訓練の「自己会話」プログラムで、自分のイライラに気付き、気持ちを静め解決策を考え、感情をコントロールするスキルを身につけることで、解決したいと考え実施した。

また、「今のは、自己会話を使っているね」と生活の中で活用している場面を評価することで、有用感を高めていきたい。訓練したことを生活にも広げていきたいと考えている。

#### 中学校第1学年（特別活動：ピア・サポート訓練）

第三中学校は、落ち着いた学校であるが、小学校からほとんど同じメンバーで人間関係が固定化し、小学校からの人間関係のトラブルをそのまま引きずっている場合もある。また、小集団では、楽しくにぎやかにしていても、場面が変わると自分を出せなかったりする。そこで、人間関係を自分達で築いていくピア・サポート訓練に取り組んだ。



「解決策はひとつではない。いろんな手段がある」と今までのピア・サポート訓練ではやってきた。今回のNASAゲームは、「いかに、集団で一つの目標を達成できるか」というもので、自分一人で考えるより、話し合

うことで正答率が高くなることを知り、他者と話し合うことの大切さを理解させるというものである。

## 2 . 第三中学校区ピア・サポート訓練の取組みについて（報告）

小中連携する中で、「仲間と関わる力が弱い」という課題が明らかになり、ピア・サポート訓練に取り組んだ。成果として、小学校では、日常生活や授業などで、「今のは、ピア・サポートの考えじゃなかった」と自分を反省したり、「自分には、できないと思っていたことでも、やってみたらできた」と自分に自信を持つようになってきた。

中学校では、ピア・サポートをとおして「自分の良さに気付く場面」が多くあった。また、お互いに意見を出し合い、仲間と協力して問題解決をしていく事は楽しいということを経験することができた。さらに、自分の考えを認めてもらえたときの喜びから、相手の考えを認めることの大切さ等も体験を通して学ぶことができた。

教職員にとっては、ピア・サポート訓練によって、日頃見られない子ども達の様子や心情がうかがえ、子どもの一面しか見ていなかったことに気付かされた。今後、ピア・サポート訓練で身につけた力をいかすための場を意識的に設定し、自尊感情、自己効力感等のよりいっそうの向上を図りたい。

## 3 . ピア・サポートと生活調べについて（福山大学心理学科 三宅幹子助教授による解説と助言）



生活調べは、「自尊感情」「自己効力感」「社会性」などの子ども達の心の様子を知るための調査である。これら3つは連動していて、過去の調査を見ると、どれも上がる学校とどれも下がってしまう学校に分けられる。また、ピア・サポート訓練を行っている学校では、訓練を通して子どもが

どう変わったのか、訓練の効果はどこにあったかという事を検証する為のものでもある。

ピア・サポート訓練を実施して効果があった小学校では、先生が児童を肯定的に評価するようになった。児童の変容を評価したり、「この子は、きっと変わる。いい方向に変わる」と期待するまなざしで、子ども達を見

ることで信頼感が伝わり、子ども達は自信とやる気を持つようになっていく。「この子はいつもだめだから」と見ていると、そのまま形にはまっ  
て変わらない。

小学校の時の先生や学校に対しての信頼感が、中学校生活の上でも大事  
なのではないかと考えられる。

ピア・サポート訓練を通して変化するのは、子どもよりも子どもを見る先  
生である。

#### 4 . ピア・サポートと生活調べについて（協議...意見の抜粋）

第四中学校区での平成18年度のピア・サポート訓練は、大学生に入  
ってもらわずに小・中学校の職員で実施した。また、ピア・サポート訓練  
で培ったスキルを異年齢交流、学年  
縦割り活動など、日常生活の中で  
いかすことで、平成17年度に訓練  
を受けてない生徒のスキルもあげる



ことができた。ピア・サポート訓練を受けている学年を育てるというだ  
けではなく、学校全体を育てるという認識を持ちながら、全職員・全生  
徒での取組みになるように研究していきたいと考えている。

ピア・サポート訓練では、「自尊感情」「自己効力感」ということが強く出  
てくる。また、この訓練は、「集団」の中での「自己」という「個」の存在  
を子ども達に的確に把握させ、「集団の中の個を高める」ことによって、  
「集団」を高める取組みになる。第四中学校区では、ピア・サポート訓練  
は、教育活動の中心となって動いているエンジンだと考えている。それ  
を、各教科や学習にリンクさせることで動きが生まれる。さらに、「ピア・  
サポート訓練」の「訓練」にこだわっている。「訓練」には、「学習」「指  
導」とは違うもっと効果的な力強い側面がある。

4月当初は、教室全体が落ち着かない状態で、人の話を聞くという、基  
本的なことも難しかった。生活調べでの「自尊感情」の数値も低く、何  
に対してもやる気がなかった。集団を高めるには、まず、「個」を高めな  
ければいけないと思い、班の一員であるという自覚を持たせる取組みを  
することで、少しずつ人の話も聞けるようになってきた。自分から、頑  
張っていこうという意欲もでてきた。また、対外的な行事でも、「良く頑  
張ったね」「大きな声だったね」と、評価をもらい自信につながった。

11月の生活調べでは、どの子ども自分の良さを見つめることができ、数値も上がった。

引っ込み思案な子どもや積極的な子ども、いろいろな子どもがいるが、場面設定をして、チャンスを与えれば、発言をしたり取組もうとする意欲が見られるようになってきた。「いい面」「良い変化」があれば、評価することが大切である。



## 5. 各中学校区小中一貫教育実施報告

別添

## 6. 会議全体をとおしての指導及び助言

ピア・サポート訓練の真髄は、「異なる個人が異なる事を尊重し、異なることに敬意を表して、お互いに尊重し支援し合う」というところにある。

「異なる」ことが尊重できず、皆一律であろうとする傾向が強く、そのことが、いじめを生んでいるケースもある。基礎学力の土台となる対人情報処理能力を、ピア・サポート訓練で養ってほしい。

ピア・サポート訓練は、答えの無い活動である。これだけやればよいということはない。やればやるほど、子ども達と先生方が、あるいは学校全体が新しく変わっていき、変わったところをさらに磨いていくやり方である。今までの、「上から下へ教え込む」というものとは違った教育活動である。

「小中一貫教育」の目的は、子ども達に力をつける、伸ばすということである。それには、小中一貫教育のカリキュラムを各中学校区でどういう形で平成20年度から進めるのか、3月には、そのまとめをして来年度の準備をする必要がある。そして、19年度は、子ども達の力を引き出すために作成された小中一貫教育カリキュラムに基づいて、子ども達にどう教えるかという、教授法に力を入れて欲しい。先生の力を伸ばし、子ども達の力を伸ばしているのだと、実感してもらいたい。子ども達にも、小学校でついた力、中学校でついた力が何なのかが分かり、地域や保護者にも分かるようにしてもらいたい。